

### 35. 加圧中に意識消失をきたした突発性難聴の1例

中村達雄 山本 衛 勝本淑寛  
伊東範行

(千葉県救急医療センター)

脳血管障害以外の外来高気圧酸素治療 (HBO) 中に意識障害をきたすことは極めて稀である。今回、加圧途中に意識消失をきたした症例を経験したので報告する。

【症例】19歳の男性 (大学生)

右突発性難聴に対する HBO 目的で紹介、来院した。特記する既往歴は無かった。血液検査、胸部単純写真に異常を認めなかった。

【経過】二重装置にて、HBOを開始したところ、1.38ATA で強い耳痛を訴えたため、加圧を中止した。直後から意識応答が消失した。減圧を開始するとともに、治療のため入室していた看護教官に観察を依頼したところ、脈の触知が微弱で徐脈であり、冷感と多量の発汗を認めた。

減圧終了時点では、昏睡状態で、脈の触知微弱と高度の徐脈を認めた。最寄りの集中治療室に搬送した時点では、意識応答は回復傾向となった。集中治療室入室時は BP92/60、HR60、SpO<sub>2</sub> は96%であった。その後、意識応答は完全に回復し、帰宅となった。既往を再確認したところ、小中学生時に何回か貧血で倒れたとのことであり、治療前の採血時にも類似の症状を訴えていた。

【考察】HBO中の意識消失の原因として、酸素中毒、脳血管障害、痙攣、心疾患 (不整脈を含む)、圧損傷に伴う緊張性気胸などが考えられるが、いずれも稀である。HBO中は副交感神経優位であるとされており、臨床経過から、耳痛から迷走神経反射をきたし、低血圧、徐脈により意識消失をきたしたことが、今回の原因として考えられる。

HBO前の患者評価として、今回のような学童期のいわゆる貧血は通常問題にされていない。しかし、採血時に類似の症状がみられており、外界から隔絶する HBOの特殊性から、患者本人に対し、十分な説明が必要であったと考えている。

### 36. 高気圧酸素治療によって生じる耳痛の追跡調査

平井 誠 福澤彰人 丸岡隆幸  
斉藤久寿

(医療法人札幌麻生脳神経外科病院)

「目的」当院では1994年より高気圧酸素治療における耳痛調査を行ってきた。過去に耳痛軽減用の耳栓を使用し、その効果を発表したが、劇的な効果は見られなかったため今回は別の視点から調査を行ってみることとした。そこで今回は、治療終了後一週間経過した患者に連絡を取り、耳痛の追跡調査を行ったので報告する。

「対象と方法」調査期間は2000年1月から2001年6月とし、対象は意識レベルの清明な患者500名。(男性352名、女性148名)調査方法は、治療開始時の問診にて聴力の程度を確認。さらに毎回の治療時に耳痛ならびに聴力を確認した。また治療終了一週間後に連絡を取り、耳痛に関しては現時点での痛み、もしくは耳閉感の程度を六段階に。聴力に関しては、治療開始前との比較を四段階に分けて調査を行った。

「結果」治療終了時に耳の違和感を訴えた患者は57名(11.4%)で一週間経過後も耳の違和感を訴えた患者は、33名(6.6%)であった。また、治療期間中に聴力の低下を訴えた患者は17名(3.4%)、調査期間中に耳鼻科へ通院をした患者は81名(16.2%)であった。また、一週間後に耳の違和感を訴えていた33名を年齢別に分けてみたが、年齢による偏りは少なかった。

「考察」一週間経過後に耳の違和感を訴えた患者33名に対し一ヵ月後に再調査を行ったが、症状が残っていたのは3名と減少していた。よって今回の追跡調査の結果を元に治療中の耳痛は一過性のものと考えられる。また、年齢による偏りも少なく、高齢者のみの難聴を促進しているとは考えにくい。今回この調査を通じて最も感じたことは、治療前のICだけでなく治療後のケアも患者管理の重要な要素の一つになると考えられたことである。